

# 五條 御所を歩く

## 王寺観光ボランティアガイド第1回研修会

9月26日に王寺観光ボランティアガイドの会の第1回研修会を「天誅組ゆかりの五條・葛城王朝の里御所訪問」をテーマに開いた。初めての研修会のことでもあり、より分かりやすくするためにレポートを書いてみた。

## 天誅組ゆかりの五條

王寺町のバスで五條市内の民俗資料館に到着。案内された資料室の椅子に座ると、かなり年を召された婦人が棒を持って立ち上がった。何が始まるのかと思ったとたんに「明治維新の魁（さきがけ）」として天誅組は1863（文久3）年8月に挙兵した尊攘激派グループは」と話し始められたのには驚いた。この年、中央政局を動かした尊攘派のうち真木



和泉らのたてた攘夷親征計画により、8月13日の孝明天皇の大和行幸の詔が出された。これを機に大和の天領占拠を目指して、土佐の吉村寅太郎、備前の藤本鉄石、三河の松本奎堂（けいどう）らを中心として、公卿・中山忠光を擁して結成された。

8月14日に京都を出て、大坂と河内を経て大和に入り、17日に五條代官所を襲撃して代官・鈴木源内を殺害し、代官所支配地の朝廷直領化、その年の年貢半減などを布告した。初めは土佐、筑後久留米、鳥取などの脱藩者が多かったが、河内の庄屋層が加わり、京都

政変（8月18日）が伝えられると、十津川郷士の大量動員をはかった。26日に目指す高取城攻撃に失敗すると、十津川郷士の離反が相次ぎ、さらに諸藩兵の追討を受けて敗走を続け、6月24日大和吉野郡鷲家口の激戦で多数の犠牲者を出して壊滅した。

## 幻の五新鉄道 バスも廃止

明治末期、五條市から新宮市までを結ぶ「五新鉄道」の建設熱が高まり、昭和12（1937）年に着工。吉野川横断の橋脚、生子トンネルの貫通まで至ったが、太平洋戦争が始まり資材不足などの理由で、工事は中断された。戦後、工事が再開され、昭和34（1959）年に五條―城戸間の路盤工事が完成し、軌道設置工事を残すのみとなったが、経済社会情勢などの変化により、中断され「五新鉄道の夢」は消えてしまった。平成9（1997）年にカンヌ映画祭で新人監督賞受賞した河瀬直美監督の映画「萌の朱雀」は、五新鉄道と西吉野村の雄大な自然を題材にした物語だった。

路盤を活用して運行していた「路線バス専用道五條西吉野線」は廃止が決まり、私達が訪れた翌日の27日に「バス専用道を偲ぶ」記念碑の序幕などさよならイベントがあり、30日には最終便を見送り49年の歴史に終止符を打った。

## 往時の情緒漂う新町通り

江戸参勤にも利用された旧紀州街道には今でも江戸時代の景観を残す街並みが残っていて、宿場・商業の町として発展した往時の栄華を偲ばせている。漆喰塗りの壁や虫籠窓、格子の家々の連なる通りを歩けば江戸時代にタイムスリップしたようだ。

### 日本最古の民家 栗山邸 新町通りで目を

引くのは国の重要文化財に指定されている栗山邸。慶長12（1607）年の棟札があり、建築年代のわかる民家としては、日本最古の

建物。現在も住居として使用されている。

**松倉重政 頌徳（しょうとく）碑** 関が原合戦での功績で一万石の大名として二見城主になった。慶長13（1608）年。城下町振興策として新町村を開設、諸役を免減し商売をやりやすくし、商人の結集を図って、五條が南和地域の中心地として発展する基礎が築かれた。町民たちは名君と崇めて、厄除弘法大師西方寺境内に頌徳碑を建てた。

**初代保安庁長官 木村篤太郎** 明治19（1886）年、五條生まれ。昭和21（1946）年、第1次吉田内閣の司法大臣、第3次内閣の法務総裁、第4次内閣で新設の保安庁長官に就任した。生家が新町通りに面して今も残っている。

**櫻井寺・天誅組本陣・首洗い鉢** 櫻井寺は天暦年間（974～957）桜井康成の創建と伝える古刹。天誅組が本陣として五條新政府と号した櫻井寺には、さらし首になった代官・鈴木源内の首を洗ったとされる首洗い鉢も残されている。



五條では、先ず天誅組のことを立て板に水のごとく話して貰って分かったのは、私は天誅組の蜂起は少数の者が以後の戦略も立てずに、先走りて失敗したとの印象があったが、地元では「明治維新の魁」として、英雄扱いされている。五新鉄道が戦争などで中止にならなければ、昔の五條市は奈良市に次ぐ人口を誇っていたそうで、実現していれば、交通の中心地として凄い都市になっていたことだろう。今の人口は王寺町と同じほどだが、街としての形態を整えている。何か必要な品物を買おうと思えば市内のどこかで買える。王寺も昔はそうであったと思うが、今はベトナム化して、商店が少なく、ちよつとした買い物は大阪か奈良へ行っている。

## 葛城の道 神々の里 名柄

背後に葛城山の長々とした尾根を頂いた名

柄の地は、古くは長江と言い、それがいつしか転じて現在の名になったと言う。ここには旧街道沿いに古い民家が軒を連ねており、江戸時代の雰囲気の色濃く残している。

大正7（1918）年、名柄に新しい溜池をつくる際に、銅鐸と銅鏡が偶然出土した。銅鐸・銅鏡ともに、弥生時代中期のものと考えられる。銅鐸と銅鏡と一緒に出土することは大変珍しく、一躍注目を浴びた。

また、名柄小学校内の発掘調査では、古墳時代の豪族が住んでいたと考えられる居館跡も見つかっている。

## 古い歴史の神話の舞台

昭和31（1956）年、葛城村との合併で葛上村となるまでは、御所市の中西部、金剛・葛城山の麓に広がる九つの集落は、南葛城郡吐田郷（はんだごう）村だった。吐田郷は日本神話の舞台として奈良県でも最も古い歴史を持つ地域である。また、江戸時代には宿場町として栄え、昭和初期まで約80軒の商店が吐田郷の名柄に集中していた。

**中村家** 御所市内で最も古い建物で、中世、吐田城主だった吐田越前守の子孫にあたる中



村正勝が慶長期（1596～1615）に建てたと推定される。江戸初期の家の造りを今に伝える建造物は、全国的にみても歴史的価値の高いもので、国の重要文化財にも指定さ

れている。

**本池口家** 江戸中期の建物で、元国務大臣・堺屋太一（本名・池口小太郎）の実家。

先祖は堺の両替商で、この名柄で木綿と菜種油の仲買を営んでいた。

**末吉家と巨木** 大和屋根、高塀作り、母屋は江戸時代中期の建物で、末吉家は大庄屋を務めていた。庭には、樹齢800年と言われるケヤキ2本とクスノキ1本が植えられている。屋敷の北側には石橋池という池があり、今も水をたたえている。庭の西側には、別名「ハガキの木」と呼ばれる多羅葉（たらよう）の木も植えられている。

**長柄神社** 名柄街道と水越街道の交差点に位置している。



祭神は下照姫で、俗に姫の宮と称し、延喜式神名帳に記されている。日本書紀によると、天武9（680）年9月9日に天武天皇が境内で流鏑馬（やぶさめ）を行ったと伝えられる。本殿のひさしには、泥

絵の具で勇壮な龍が描かれている。

**一言主神社** 願いを一言だけ聞いてくれる「いちごんさん」として地元の人から親しまれている。祭神は、古事記や日本書紀の中に出てくる事代主命（ことしろぬしのかみ）である。

雄略天皇が葛城山で狩をしている時、神は天皇と同じ姿で現れ、天皇が「お前は何者だ」と問いかけたところ「私は善も悪も一言で言い放つ神である」と申され、天皇はひれ伏し、その後、共に狩りを楽しみ、神は久米川（現・曾我川）まで天皇を送って行ったということ



だ。しかし、続日本書紀によれば雄略天皇と狩りのことで、いさかいを起こし、四国の土佐に流されたという。土佐風土記によれば、その後許されて葛城の高宮付近に祀られたと記されている。

◇ ◇ ◇

御所・名柄地区では、銅鐸、銅鏡や古墳時代の居館跡などから、葛城王朝などの古い歴史を感じることで、江戸時代から昭和にかけての商店（商業）が栄えたことは、大きな家が数多く残っていることから分かる。

最後に、今回参加した39人が一同に集まり、豆腐料理に舌鼓を打った。その時に研修受講生の参加者13人が、一人々々が順番に立って自己紹介と研修会に参加した感想を述べて貰ったのが非常に良かった。また、同席して頂いた名柄のガイドさんから先輩として「話は短めに。少人数をガイドする時は要注意（やたらと詳しい人がいる）。女性は花が好き（自分の興味のあることに関心）」などの貴重なアドバイスを頂き今後のために有難かった。

五條、御所のボランティアガイドの皆さんにはお世話になり、有難うございました。